

SDG s の国際的な潮流と地域金融機関の対応

九州大学 馬奈木俊介

経済成長をめざした結果、現代文明は環境破壊や気候変動という大きな問題を引き起こした。人間社会に目を向けても、富を持てるものと持たざるものあいだに格差が生まれた。富は集まることによって、さらなる富の集中を生む。その格差が不安を生み、虚勢のための無駄な消費を招く。GDP とはそもそも、豊かで幸福な社会をめざすための経済発展を測る指標である。しかし、1 年間に生産された財やサービスの総額から計算するため、新しい商品やサービス、インフラなどをつくり続ければ自然と増えていく。そこには金銭に換算されない価値、たとえば幸福につながる健康や自然といった豊かさは内包されない。これで本当に、幸福な社会を築けるのだろうか。

最近のわれわれの研究で、日本人の Well-being (幸福・福祉) にとって重要な要素を調査したところ、生活全般に関わる項目では 1 位「家族との関係」、2 位「所得・財産」、3 位「生活環境」となった。環境問題に関わる項目では 1 位「気候変動」、2 位「温暖化」、3 位「水質汚染」である。この結果からもわかるように、人の幸福においては経済的な豊かさだけでなく、人との関わりや環境も重要となる。

現在、世界は SDG s の達成に向けて動き出している。SDGs とは以前の国連目標・ミレニアム開発目標 (Millennium Development Goals:MDGs) の反省をふまえたものである。MDGs は 2000 年 9 月に国連で採択された目標で、2015 年までの国際開発目標として 8 つのゴールが設定されたが、そのすべてが達成できたわけではなく、また地域ごとに達成状況のばらつきがあるなどの課題も残った。筆者は国連の SDGs の策定に携わってきた。SDGs の特徴は、あくまでも目標であって判断基準を定めていない点にある。もちろん目標設定は非常に重要で、さまざまな効果の進捗を測ることは、達成への道筋の判断材料となる。ただし先に示したように、そのときに必要になるのが、人びとの幸福にとって重要な「みえないものの価値」を測るための指標である。この「みえないものの価値」を測る指標が、国連が発表した「新国富指標 (Inclusive Wealth Index : IWI)」である。これはすなわち、「現在を生きるわれわれ、そして将来の世代が得るだろう福祉を生み出す、社会が保有する富の金銭的価値」を表す。具体的には、人工資本、人的資本、自然資本から構成され、経済から環境、健康まで包括的に網羅する指標だ (図表 1 参照)。すでに SDGs の達成度合い、そして地域の豊かさをとらえるための指標として活用されている。これらを踏まえて、SDG s の国際的な潮流と地域金融機関の対応を議論する。具体的には、我々の G20 レポートや株式会社サステナブルスケール、一般社団法人ナチュラルキャピタルクレジットコンソーシアム、株式会社 aiESG の事例を紹介する。